

読書通信



No. 111

① 民主党政権下で内閣官房参与としてご苦労されていた思想家の松本健一さんが、東日本大震災の3カ月後に経済倶楽部で「政治と思想のあいだ」と題して津波、原発、復興、尖閣、東アジアなど幅広く、良い話をされた。今、講演録（2011年8月号）を取り出してみると傍線がたくさん引いてあって懐かしい。

松本健一『官邸危機』（ちくま新書、950円）ではもちろん話をもっとたっぷり広がり興行きもあるが、あの講演での問題提起や事実関係が随所に登場する。官邸日記のたぐいという

より、危機の本質、党綱領なき民主党、官僚独裁制、政治家の責任倫理、憲法問題、第三の開国など多彩な論点がちりと（しかし非常にわかりやすく）取り上げられていながら、インサイドストーリー的な興味もたっぷり味わいつつ読むことができる。前掲の講演会では（不肖）閉会の辞で、ポスト菅が仙石ならと言及しているけれども、本書を読んでまさにそれ以外になかったと思わずにはいられなかった。

② 韓国の沈没船事故は痛ましい限りだが、船長以下の無責任ぶりは永く海難史に残るだろう。日韓が近くて遠い国から相互理解と友好の関係へ進むためには若者たちの交流を深めるしかないようにも思うが、日本の若者から哀悼と友情の行動を取ることはできないものだろうか。

それはさておき**辺真一**『大統領を殺す**韓国**』（角川 one テーマ21、864円）は面白かった。李承晩から（朴槿恵はこれからだが）李明博までの10人全員がクーデターで辞任、暗殺、本人が親族が不正蓄財で逮捕、さらには自殺と皆悲惨な結末を迎えている。大統領制度の問題点や韓国社会の特殊性、個々の大統領のエピソードや人間性など、なるほどと思わされる事実が次々に紹介、解明されて大いに勉強になる。

③ さしずめ「産経派」とでもいう論者による「自虐史観」批判はあまり気乗りがしないが、著名な在日外国人ジャーナリストの主張となる等閑視するわけにもいかないと思いついてみた。ヘンリー・S・ストークス『**連合国戦勝史観の虚妄**』（祥伝社新書、864円）は極東裁

判、南京大虐殺、従軍慰安婦など日本が世界に異を唱えるべきだとするテーマで日本の弱腰を叱咤激励する。歴史的事実の提示も少なからずあるが、議論の余地もまた大いにありそうだ。三島由紀夫論でも熱弁が振るわれている。

④ へたな小説よりも新明解国語辞典のほうが面白いことは確かだろう。佐々木健一『辞書になつた男』（文藝春秋、1944円）はお勧めである。三省堂国語辞典と新明解をつくった二人の編纂者の微妙な人間関係を、二つの辞典の語釈を巧みに引用しながら描き切つて見事な出来栄だ。これがすべて事実だというのだから、まさに事実（字引）は小説より奇なりというべきだろう。個人的には新明解を多用してきたが、編纂者としては二人、個性の塊である。（純）